

Title	夏
Author(s)	水野, 尚之; ウォートン, イーディス
Citation	英文学評論 = Review of English Literature (2019), 91: [1]-[10]
Issue Date	2019-02-28
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_91_(1)
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

夏

イーデイス・ウオートン
水野尚之 訳

第一章

ノース・ドーマーの通りの端にあるロイアル弁護士の家から、少女が出てきて、戸口に立った。六月の午後が始まってすぐのことだった。春らしく澄んだ空が、村の家々の屋根にそして村のまわりの草地や落葉松に、銀色の陽光の雨を降り注いでいた。かすかな風が丘の峰の丸く白い雲のあいだを流れ、その影に野原を横切らせ、草の生えた道を下らせた。その道は、ノース・ドーマーを通る時には通りの名前に変わっていた。この場所は高い平野に位置し、もっと木々に覆われたニューイングランドの村のような豊かな木陰を欠いていた。鴨の池のまわりのシダレヤナギの茂みやハチャードの門の前のドイツトウヒが、ロイアル弁護士の家と、村の反対側の端で道が教会の上へと上っていき墓地を囲む黒いドクニンジンの塀沿いを通る間を、ほぼ唯一、路傍の影を投げかけていた。

わずかな六月の風が、通りを渡りつつ、ハチャードのトウヒの陰気な縁を揺らし、ちよūdそその下を通りが

かつた若い男の麦藁帽を捕らえ、鴨の池へと通りを転がした。

彼が帽子を捕まえようと走っている時、ロイアル弁護士士の戸口に立った少女は、彼が見知らぬ人であること、都会の身なりをしていること、このような災難の際に若くて気取らない人たちが笑うように彼が歯を見せて笑っていることに気づいた。

彼女の心臓は少し収縮した。そして休日の顔をした人々を見た時にしばしば彼女を襲う収縮を感じ、彼女は家の中に引き返し、すでにポケットの中に入れたことが分かっている鍵を探すふりをした。金メッキの鷲が乗った狭い緑がかつた鏡が廊下の壁にかかっており、彼女は自分の姿をしげしげと見た。そして千度目になるが、自分がアナベル・ボルチ——時々スプリングフィールドからやってきて、ハチャード老嬢の家で一週間を過ごす娘——のような青い目をしていたらと思ひ、小さな浅黒い顔の上の日に焼けた帽子を伸ばし、彼女はふたたび陽光の中へと出た。

「全部嫌い！」彼女はつぶやいた。

若い男はハチャードの門を過ぎていて、彼女は通りにひとりとなった。ノース・ドーマーはいつも空っぽの場所、六月の午後三時には、わずかな数の頑丈な男たちは畑か森へ行っており、女たちは家で退屈な家事をしていた。

指で鍵を揺らしながら、なじみの場所で見知らぬ人を見たことで注意を高められ、少女は、あたりを見回しつつ歩いていった。よその土地から来た人たちにはノース・ドーマーはどう見えるのだろうか、と彼女は思った。彼女自身は五歳の時からここに住んでおり、ここがちょっと重要な場所だと長い間思っていた。しかし一年ほど前、ヘップバーンの新任の聖公会牧師マイルズ氏がノース・ドーマーの教会で礼拝をするために隔週の日曜日

に——道路がえぐられて通れなくなった時以外は——来るようになり、伝道者の熱意の発作で、聖地についての立派な説教を聞かせるために、若者たちをネトルトン^③に連れていくことを提案した。そしてノース・ドーマーの未来を担う十人ほどの少年少女が荷馬車に乗せられ、山を越えてヘップバーンに運ばれ、さらに列車に乗せられてネトルトンにまで連れてこられた。その信じがたい日、チャリティー・ロイアルは初めてそしてただ一度、汽車の旅を経験し、正面が板ガラスの店を覗き、ココナッツパイを味わい、映画館に座り、画面の前で男の人が理解できないことを言うのを聞いていた。彼の説明によつてその画面の理解を妨げられなければ、彼女は画面を楽しく見ていたのだつたが。この旅行の経験によつて彼女はノース・ドーマーが小さな世界であることを学び、村の図書館の司書としての立場では刺激されなかつた知識への渴望を彼女の中に引き起こした。一、二か月のあいだ彼女は、ハチャード記念図書館の埃っぽい本を、熱に浮かされたように見境なく読みふけた。やがてネトルトンの印象は薄れはじめ、ノース・ドーマーを宇宙の基準と考える方が、読書を続けるより楽であると彼女は思うようになった。

見知らぬ人を見かけたことでネトルトンの記憶が今一度よみがえり、ノース・ドーマーは現実の大きさへと縮んだ。ロイアル弁護士の色褪せた赤い家から白い教会までを見回し、彼女は容赦なくその村を評価した。山の中の風雨にさらされ日に焼けたその村は、男たちに見捨てられ、鉄道、路面電車、電信、そして現代の共同体の生活と生活を結ぶあらゆる利器を持たない状態でそこにあつた。商店も劇場も講演も「ビジネス地区」もなく、あるのはただ、道路の状態が許せば隔週の日曜に開く教会、そして二十年間新しい本が購入されず、古い本が湿つた棚で静かに朽ちていく図書館だけだつた。しかしチャリティー・ロイアルはいつも、自分の運命がノース・ドーマーで始められたことを特権と思うべきだと言われてきた。自分が生まれた場所に比べれば、ノース・ドー

マーはもつとも洗練された文明のあらゆる恩恵を表していることを、彼女は知っていた。子供の時にここに連れてこられて以来、村の誰もがいつも彼女にそう言った。ハチャード老嬢でさえ、ある恐ろしい時に彼女に言った。「嬢や、お前を山から連れてきたのはロイアルさんだということを、決して忘れてはいけないよ」

彼女は「山から連れて」こられた。イーゲル山脈のわずかな坂の上に陰鬱な壁となり、寂しい谷間に対して絶えず暗い背景となっている断崖から連れてこられたのだ。山はたつぷり十五マイル離れていたが、それは低い丘から突如として聳えていたので、その影をノース・ドーマーに投げかけんばかりに見えた。そして巨大な磁石のように雲を引き寄せ、嵐の時には谷を越えてその雲を振りまいた。ノース・ドーマーの澄んだ夏の空に、一筋の蒸気が尾を引くとしたら、船が渦巻きに漂っていくようにその蒸気は山に向かつて流れていき、岩に当たって引き裂かれ数を増やし、雨や暗闇となって村に戻ってきた。

チャリティーは山のことをよく知っているわけではなかった。しかしそこはひどい所であり、そこから来たことは恥であることは分かっていた。そしてハチャード老嬢がかつて言ったように、ノース・ドーマーでその身に何が起きようとも、自分はそのから連れてこられたことを思い出し、口をつぐんで感謝すべきであることも、チャリティーは分かっていた。彼女は山を見上げ、こうしたことを思いながらも通り感謝しようと努めた。しかしハチャードの門から若い男が入ってくるのを見たことでネットルトンの華やかな通りの光景を思い出し、彼女は自分の古い日よけ帽が恥ずかしくなり、ノース・ドーマーに嫌気がさし、スプリングフィールドのアナベル・ボルチを嫉妬まじりに意識して、その青い目をネットルトンの光輝よりも輝かしいどこか遠くへと見開いていった。

「全部嫌い！」と彼女はふたたび言った。

通りを半ば進み、彼女はつなぎ目がゆるくなった門のところで止まった。その門を過ぎて、煉瓦の舗道を歩き、彼女は木の白い柱が切妻壁を支えている煉瓦の奇妙で小さな聖堂に着いた。その壁には「ホノリウス・ハチャード記念図書館、一八三二年」と曇った金文字で刻まれていた。

ホノリウス・ハチャードはハチャード老嬢の大叔父だった。もともと、彼女は間違ひなくその言い方を逆にし、彼女の卓越性の唯一の資格として、彼女が彼の甥の娘である事実を前面に出しただろう。なぜなら十九世紀初頭には、ホノリウス・ハチャードはつましい名士だったのである。図書館の内部の大理石の石板が減多に來ない訪問者に教えるように、彼は非凡な文学的才能を有し、「イーグル山地の隱者」と名付けた論文集を執筆し、ワシントン・アーヴィングやフィッツ・グリーン・ハレックとも交友し、イタリアで罹った熱病によつて早死にした。これがノース・ドーマーと文学との唯一のつながりであり、そのつながりは記念碑の建設によつて敬虔に伝えられていた。その建物に毎週火曜と木曜の午後、チャリティー・ロイアルは、物故した作家のシミだらけの銅板印画の下の机に座り、墓の中の彼と彼の図書館の中の自分と比べてどちらが死をより感じているだろうかと思つた。

胸憂げな足取りでその牢獄へ入り、彼女は帽子を取つてミネルヴァの石膏の胸像にかけた。そして雨戸を開け、身を乗り出して窓の上の燕の巢に卵がないかを見た。最後に彼女は机の後ろに座り、木綿のレースの一卷と鋼の鉤針編みの鉤針を取り出した。彼女は編み物が得意でなく、幅の狭いレースを半ヤード作るにも何週間もかかった。そのレースを、彼女はぼろぼろの『ランプライター』^⑤の布製の芯に巻き付けていた。しかし彼女の夏用のブラウスを飾るレースを作るには他にやり方がなかった。そして村で一番貧しい娘のアリー・ハウズが肩のあたりが羨ましいほど透けた服で教会に姿を現して以来、チャリティーの鉤針はいつそう速く動いた。彼女はレースを

広げ、ループに針を刺し、額に皺を寄せて編み物に身をかがめた。

突然扉が開いた。そして目を上げる前に、彼女は、ハチャードの門から入ってくるのを自分が見たあの若者が図書館に入ってきたのを知った。

彼女に注意するでもなく、彼は長い丸天井風の部屋をゆっくりと歩き始め、両方の手を背中に当て、近視の目で埃っぽい装丁の列をあちこち覗いた。とうとう彼は机のところに来て、彼女の前に立った。

「カード目録はありませんか？」彼は唐突に愛想のよい声で尋ねた。この問いの奇妙さに、彼女は編み物を落とすとした。

「何ですって？」

「いや、その……」彼は言葉を切った。彼女は自分が自分を初めてちゃんと見たと思った。ここに入ってきた時、その近視眼であたりを見回して、どうやら彼女を図書館の内装の一部と思っただけだった。

彼女を見つけた際、彼が話の糸を見失ったという事実を、彼女は見逃さなかった。彼女は下を見て、微笑んだ。彼も微笑んだ。

「いや、あなたがご存知とは思えません」彼は言い直した。「実際、ほとんど残念と言おうか……」

彼女は彼の口調にかすかな謙遜を見て取ったと思い、鋭く尋ねた。「なぜですか？」

「なぜならこのような小さな図書館では、すぐ横で、司書の助けを借りて捜した方がずっと楽しいからです」彼は敬意を込めて司書という言葉をつけ加えたので、彼女は気分を和らげ、ため息をつきながら答えた。「残念ながらあまりお力にはなれないと思います」

「なぜですか？」今度は彼が尋ねた。とにかく本はたくさんありませんし、自分はほとんどの本も読んだこ

とがありません、と彼女は答えた。「虫が食べています」彼女は陰気につけ加えた。

「そうですか？ それは残念です。何冊か良い本がありますから」彼は会話に興味を失くしたようで、彼女のことを忘れたかのようにふたたび歩き去った。彼の無関心が彼女を苛立たせた。もうほんの少しでも彼を助けまいと思ひ、彼女は編み物を取り上げた。どうやら彼も助けを必要としていなかったようで、長い間彼女に背を向けて、蜘蛛の巣のからんだ背の高い本を、遠くの棚から一冊また一冊と降ろしていった。

「おやおや！」彼は声を上げた。目を上げた彼女は、彼がハンカチを取り出して、手に持った本の端を丁寧に拭いているのを見た。この動作は、彼女の本の手入れの仕方についての不当な批判と彼女には思え、彼女はいらして言った。「本が汚いのは私のせいじゃありません」

彼は振り向いて、また興味を抱いて彼女を見た。「ああ、ではあなたは司書ではないのですね？」

「もちろん司書です。でも全部の本の埃を払うことはできませんわ。おまけに、誰も本を見もしないのです。

ハチャードさんも足が弱って訪ねてこられないし」

「そうですね」彼は拭いていた本を下げ、黙って彼女を見て立っていた。図書館がどう管理されているかを探るためにハチャード老嬢が彼を送ってきたのだろうか、と彼女は思った。そう思うと彼女の怒りは増した。

「たった今、あなたが彼女の家に入っついていかれるのをお見かけしましたが？」個人名を言うのを避けるニューヨークランド風の言い方で、彼女は尋ねた。なぜ彼が彼女の本の中をうろつき回るのか、彼女はどうしても知りたく思った。

「ハチャードさんのお宅に？ そうです、彼女は僕のいとこで、僕はそこに滞在しています」若者は答え、チャリティーの露骨な疑いを解こうとするかのようにつけ加えた。「僕の名前はハーニー、ルーシアス・ハー

ニです。ハチャードさんが僕のことを話したかもしれません」

「いいえ、おっしゃいませんでした」と彼女は言った。「はい、おっしゃいました」と言いたかったが。

「ああ、そうですね」ハチャード老嬢のいとは笑いながら言った。また間があり、自分の答えが励みにならなかったとチャリティーは考えたが、「あなたは建築にはお詳しくないようですね」と彼は言った。

彼女は完全に困惑した。彼を理解しているように見せたいと思えば思うほど、彼の言葉は理解しがたいものになった。彼はネトルトンで絵画を「説明した」紳士を思い出させた。そして自分の無知の重みが、棺に掛ける布のようにふたたび彼女にのしかかった。

「つまり、ここには古い家に関する本を置いておられないようです。またこれについて、この地方ではあまり調査されていないように思います。みんなプリマスやセイレムへ行くのです。まったくばかげています。僕のとこの家はすばらしいです。この地にはきつと過去があったに違いありません。昔はもつといろいろあったはずです」自分の話を聞き、話しすぎたと思っている内気な男のように赤面し、彼は急に話をやめた。「僕は建築技師で、このあたりの古い家を調べています」

彼女は目を睜った。「古い家ですって？ ノース・ドーマーではすべてが古いですが。とにかく人々が」
彼は笑い、ふたたび離れていった。

「この土地の歴史についての本は何かありませんか？ 一八四〇年ごろ書かれた本があったと思います。最初の入植についての本かパンフレットが」しばらくして彼は、部屋に向かうの端から言った。

彼女は編み物の鉤針を唇に押し当て、考えた。『ノース・ドーマーとイーグル郡の初期郡区』のような本があったことを覚えていた。彼女はその本について特に恨みがあった。ぐにゃつとした弱弱しい本で、いつも棚か

ら落ちようとしているか、両側の本に支えさせて押し込もうとすると奥へ入って見えなくなってしまうかだったのだ。ノース・ドーマーや、ドーマー、ハンブリン、クレストン、クレストン川といった近隣についての本をわざわざ書こうなどとした人があったなんてと思いつながらその本を最後に手に取った時のことを、彼女は覚えていた。彼女はそれらをすべて覚えていた。荒涼とした尾根のひだに建てられた家の残骸。ノース・ドーマーが林檎を摘みに行ったドーマー。クレストン川には、かつては製紙工場があり、灰色の壁が川のそばで朽ちていた。そして初雪がかならず降るハンブリン。こんなものが名声への称号だった。

彼女は立ち上がり、ほんやりと書棚の前を歩き始めた。しかしその本をどこに収めたか思い出せなかった。それがいつもの悪戯を仕掛け、姿を隠したままでは、とも思った。今日は運のいい日ではなかったのだ。

「どこかにあると思います」誠意を見せようと彼女は言った。しかしそう言ったものの確信はなく、この言葉も何も伝えていないと感じた。

「ああ、そうですか」彼はまた言った。彼女には彼が立ち去ろうとしているのが分かり、その本を見つけないとこれまで以上に思った。

「この本は次にお借りします」と彼は言った。机の上に置いた本を取り上げ、彼は彼女に手渡した。「ところで、ちょっと空気と日光に当てれば、この本は良くなります。かなり貴重なものです」

彼は彼女に会釈し、微笑み、出て行った。

(註)

- ① スプリングフィールド——Springfield. 一六三六年、イギリス人の毛皮商人ウイリアム・ピンチヨンによって創設された。ボストン、ウスター、プロヴィデンスに次ぐニューイングランド第四の都市。初期の植民はいくつかの川の合流した地点になされ、ボストン、オールバニー、ニューヨーク市、モントリオールへの交通の要となった。一七七七年、ジョージ・ワシントンとヘンリー・ノックスはこの地に国営兵器工場を置き、一七九四年合衆国最初のマスケット銃を、後に有名なスプリングフィールド・ライフルを生産した。一七七七年からベトナム戦争中の閉鎖まで、スプリングフィールド兵器工場はこの地に熟練した労働者を集め、長きにわたってこの地を精密機械工業の中心地にした。
- ② 聖公会の牧師——Episcopal clergyman. Episcopal Church in America 米国聖公会。米国において教義、規律、礼拝形式を継承する英国国教会系の独立した教派。一九七六年以前は Protestant Episcopal Church と称した。
- ③ ネットルトン——Netleton. 一八七九年 A・E・ネットルトンがシラキュースで創業した Netleton Shoes 社と関係があるか。
- ④ フィッツグリーン・ハレック——Fitz-Greene Halleck (一七九〇—一八六七)「ニッカーボッカー・グループ」のアメリカの詩人。「アメリカのバイロン」と呼ばれ、その詩は広く読まれたが、後に人気は衰えた。ジョン・ジェイコブ・アスターの私設秘書を務め、アスター図書館の管財人の一人に任じられた。
- ⑤ 『ランブライター』——*The Lamplighter*. アメリカの小説家マリア・スザンナ・カミングズ (Maria Susanna Cummins, 1827-1866) 作の感傷小説。一八五四年出版。